



# GRL NEWS

Gender Research Library  
Nagoya University

名古屋大学  
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

## No.4

2019年7月発行

## 開館一周年記念シンポジウムを開催しました

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ (GRL) が、2018年11月に開館一周年を迎えたのを機に、ジェンダー研究機関の運営に携わられている研究者の方々に講師を招き、各研究機関の創設の経緯、主な活動、運営上の課題などを紹介いただくとともに、GRLの今後に示唆をいただくシンポジウムを開催しました。

### ◆シンポジウム プログラム

「ジェンダー研究機関の過去・現在・未来」  
日時：2019年1月11日 (金) 17:00~19:00  
場所：名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ 2階レクチャールーム

●基調講演：「大学における女性学・ジェンダー研究センターの役割と課題」  
講師：伊田久美子 (大阪府立大学女性学研究センター長・大阪府立大学教授)

### ●パネルディスカッション

パネリスト：石井クツツ昌子 (お茶の水女子大学ジェンダー研究所長・お茶の水女子大学教授)  
松岡悦子 (奈良女子大学アジア・ジェンダー文化研究センター長・奈良女子大学教授)  
高松香奈 (国際基督教大学ジェンダー研究センター長・国際基督教大学准教授)  
司会：新井美佐子 (名古屋大学人文学研究科准教授)

●GRL活動報告：榊原千鶴 (名古屋大学男女共同参画センター教授)

伊田氏による基調講演では、大阪府立大学女性学研究センターの四半世紀にわたる歴史と、教育との緊密な連携を柱とする活動実績の紹介とともに、「女性の視点や経験からの学問研究の見直し」、「女性だけでなく、男性のあり方や男女の関係性の視点からの学問研究の見直し」といった学問研究の基盤におけるジェンダー学の意義、必要性が指摘されました。



伊田久美子氏

パネルディスカッションでは、石井氏より、国際的な教育研究拠点の形成をめざすという目標の明確化と、諸事業を推進しうるスタッフの充実ぶり、松岡氏より、アジアを軸としたジェンダー研究の推進と、若手研究者の育成と研究の活発化、高松氏より、誰もが安心できる居場所、ジェンダー・セクシュアリティに関する学びと議論の場づくり、といった各機関の特徴を伺うことができました。

こうした特徴は、機関創設から現在に至るまでのさまざまな活動を通して培われたものであり、各機関の戦略ともなっています。

今回のシンポジウムを通して、課題を含め、講師の方々の貴重な経験の蓄積にふれることができたこと、そして今後のGRL運営のヒントをいただけたことは、何よりの収穫でした。



左から、伊田久美子氏、石井クツツ昌子氏、松岡悦子氏、高松香奈氏

## 書籍紹介 隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』星海社、2018年

(名古屋大学経済学研究科教授)  
隠岐さや香

文系と理系にわけるのはもう古いと言われはします。しかし、ジェンダーに関心のある方ならば、だからといってすぐに消え去るわけではない問題があるのをご存知のことでしょう。たとえば人生の中で、「女らしさ」や「男らしさ」について周囲に何かを言われる際に、それが服装や仕草振る舞いに留まらず、特定の対象を扱う学問分野や進路選択の問題にまで及ぶことがあります。SNSを検索すれば、「理系に進学したかったけど女の子は向かないと言われた」「男が文学部はやめとけと言われた」などの眩きがすぐに見つかるのはその例です。

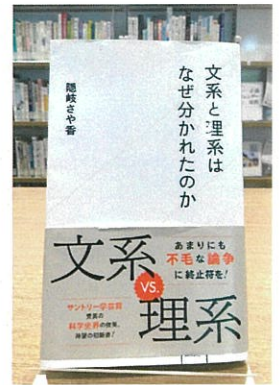
本書は、「文系・理系」をめぐる様々な状況をわかりやすく整理するために書かれたものです。ジェンダーについての議論は第四章目に位置し、全体のうち一章分を占めるに過ぎません。そのため、ジェンダー研究に詳しい方々にとっては、既知の内容が

紹介されているとの印象になるかと思えます。主には、「女性は数学に向いていない」というステレオタイプな考え方が国際学力比較テストを用いた近年の調査により覆されていることや、数学や自然科学に関心のある女性が遭遇する差別のあり方について紹介しています。

他の章の内容は次の通りです。第一章では手始めに、西洋世界で発展した様々な学問の分野が「自然科学」と「それ以外の分野」(すなわち人文社会科学)に分かれていく歴史をまず確認します。第二章では、日本が近代化の際に文系・理系という枠組みとどう向き合ったのかということを扱いました。そして第三章では、産業界が文系・理系をどのように扱ってきたのかという問題を検証します。具体的には、イノベーション政策の展開と共に、一部の分野(主に理工系)を経済発展と強く結びつける議論が生まれたことなどが語られま

す。第四章は先に述べた通りです。そして第五章では、文系・理系の諸学問の特徴を踏まえた上で、「文理融合」や「学際的研究」の可能性と難しさを論じています。

最後にジェンダーの問題に話を戻すと、現在、「女性と理系」についての研究は数多くあります。しかし、「女性と文系」「男性と文系」についての研究は殆どありませんし、関心を集めてもいません。この社会は依然として、「伝統的に男性の多い領域に進出する女性」が関心を集め、まなざされる場であり続けています。



## GRLアーカイブの活用と充実のために

(公益財団法人東海ジェンダー研究所)  
尾関博子

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ(GRL)の目的には「ジェンダー問題についての知を長く保存し、ジェンダー研究者等に提供するため、ライブラリとアーカイブを構築する。」ことが掲げられ、図書と並び女性やジェンダーに関する活動や歴史の記録資料をアーカイブとして収集・保存・提供することが大きな柱となっています。

このため東海ジェンダー研究所は、図書とともに資料の収集・整理にも重点を置き、GRL開館前の2017年10月に次のアーカイブをGRLへ寄贈しました。

1. 名古屋市の共同保育所関連資料  
2. アメリカ女性史関連資料  
3. イギリス性差別禁止・男女平等関係資料  
このうち1は、東海ジェンダー研究所が2016年に出版した「資料集 名古屋における共同保育所運動：1960年代～1970年代を中心に」の基礎となった資料です。

また最近では、整理を終えた次のアーカ

イブを2019年3月にGRLへ寄贈しました。

4. 国際婦人年あいちの会資料  
5. 男女雇用機会均等法関連資料  
6. 労働省・厚生労働省発表資料  
(女性関連・雇用関連資料を除く)  
7. ワーキング・ウーマン資料  
4.5.6.は、大脇雅子弁護士から、7.はワーキング・ウーマン(男女差別をなくす愛知連絡会)から東海ジェンダー研究所に寄贈された資料です。4.は、1975年の国際婦人年に世界の女性たちの活動に呼応して愛知の女性5人(大脇雅子、水田珠枝ほか)が発起人となり、多くの女性たちと活動した同会の行動計画、活動記録、発行ニュースほかの資料で、愛知・名古屋での先駆的な女性たちの活動記録資料です。この活動が「労基法改悪反対! 男女雇用平等法を成立させる愛知の会」を経て、7.のワーキング・ウーマンに一部引き継がれていきます。

5.と6.は一連の資料で、1985年成立の

「男女雇用機会均等法」に関して、1997年の改正(募集・採用、配置・昇進に関する女性の差別的取扱い禁止ほか)を中心に、1999年改正、2001年改正までの国会の立法過程の討議資料、国会会議録、国の関係資料などです。女性関連・雇用関連の労働省・厚生労働省発表資料は、5.に含まれています。

これらアーカイブの目録はGRLのホームページとライブラリで公開されています。ジェンダー研究者をはじめ多くの方々が資料を活用してジェンダー研究がすすむこと、また今後も新たなアーカイブが構築されることを期待しています。



## ポップカルチャーの政治性をめぐるジェンダー学際研究

(GRL研究員)  
張 瑋容

マンガ、アニメ、アイドルなど、日本のポップカルチャーは「ソフトパワー」を持つと言われるほど、世界中の人々を魅了しています。ポップカルチャーには若者たちを中心に楽しんでいるという軽い印象があるかもしれませんが、ジェンダーの視点を通してポップカルチャーを見てみると、ポップカルチャーの政治性が様々な次元において表れることが分かります。

たとえば、ミクロ次元におけるファン活動やアイドルのパフォーマンス、メゾ次元におけるマーケティング戦略やメディアコンテンツにおける表象、マクロ次元におけるポップカルチャーのグローバル化などから、ポップカルチャーとジェンダーはどのように複雑に関係するかを見出すことが面白いと思います。

筆者の研究関心は、まさに「ポップカルチャーの政治性」にあります。台湾出身の筆者に、日本のアニメやアイドルへの関心

が芽生えたのは、小学校時代です。折しも、1990年のこの時期は、ちょうど日本のポップカルチャーの積極的な受容と消費、つまり「<sup>ハル</sup>日現象」の勃発期でした。その頃から、なぜ台湾人でありながら、日本のアニメキャラクターやアイドルに魅了されるのだろうと、自分自身に問い続けてきました。大学院で社会学とジェンダー研究に出会ったことがきっかけとなり、「ポップカルチャーの政治性」、つまり、当事者の身体的実践、及びそれを通して特定の文脈の下で構築された文化的事象の社会的意味を探究する研究を行ってきました。

たとえば、女性オタクを中心とする「執事喫茶」における台湾人女性の経験から、男性の身体と男性同士のホモソーシャルな関係性への「妄想」を通して構築される女性のセクシュアリティを分析できます。このような日本のポップカルチャーの受

容とローカリゼーションをさらに日台関係の歴史的・政治的文脈に位置づけて分析することで、ポップカルチャーの消費と受容はファンとアイドルやアニメキャラクターのジェンダー化された関係性の次元にとどまらず、それは日台の歴史・政治関係の渦中にあるがゆえに、台湾のナショナル・アイデンティティの形成とも関連する、というポップカルチャーの政治性の分析へとつながります。

ジェンダーは単なる男女の性差ではなく、社会構造とも緊密に関係しているのと同様に、ポップカルチャーをジェンダーの視点で見ること、ポップカルチャーの政治性を見出すことが可能になります。だからこそ、これからもジェンダーと社会学を融合する学際研究を通して、ミクロとマクロ次元を横断するポップカルチャー研究の可能性を開いていきたいと思っています。

## 発展途上国の女性たちの政治とグローバルな正義

(名古屋大学大学院法学研究科博士後期課程)

山田祥子

現代に生きる私たちは、海外の様子を瞬時に伝えることができるメディアの発達や各種統計の存在により、発展途上国には極度の貧困に苦しむ膨大な数の人々がいることや、先進国と途上国との間に巨大な経済格差が存在するのを知っています。

こうした世界的な貧困や格差といった事実をどのように捉え、何がなされるべきなのかという点について、私たちの間には様々な見解があり得ます。たとえば、ある人は、途上国における貧困問題の主要な原因はその国の政治のあり方にあるので、先進国が途上国を援助するにしても、それをあくまで慈善の問題だと考えるでしょう。また別の人は、途上国における貧困は不正なグローバルな経済的秩序によってもたらされているので、先進国とその市民は、こうした秩序をより正しいあり方へと改変していく義務を負っている

と主張するかもしれません。私の専門であるグローバル正義論は、こうした規範的な問いを政治哲学や法哲学における知見を用いながら考えていく、比較的歴史が新しい研究分野です。

グローバル正義論において、ジェンダーの視点はこれまで希薄であったと指摘することができます。その原因はおそらく、この理論において「世界の貧しい人々」が一枚岩的に捉えられてきたことにあると考えられます。つまり、そうした貧しい人々の多くが多様な文化的・社会的背景を有する女性や子どもであり、また、貧困にはジェンダー構造が少なからず関係しているという事実を、これまでのグローバル正義論は十分に考慮してこなかったのです。

途上国において、女性たちは時には国際NGOなどと連携する形で、貧困の原因となっている問題を緩和し、より公正

な社会を実現するための様々な運動や活動を展開しています。こうした「女性たちによる政治」を見

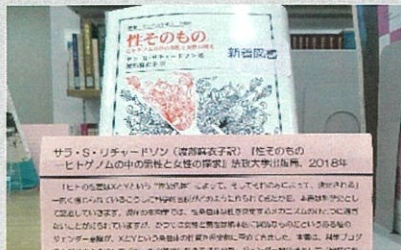


てみると、それらが先進国から途上国への富の再分配のみによっては解決できないような、ジェンダー構造を含む社会的・政治的構造にアプローチしようとするものであることがわかります。また同時に、途上国の女性たちの政治は、貧しい人々がたんに不正な構造の犠牲者であるだけではなく、それを変革していく「主体」でもあるという視点をもたらすものです。私は、このように途上国の女性たちによる政治という実践に目を向けることが、グローバル正義論の既存の理論枠組みの問い直しにつながっていくと考えています。

## お知らせ

### 「科学とジェンダー」の図書コーナー

GRLでは2019年度は「科学とジェンダー」のテーマでセミナーを開催する予定です。図書室では「科学とジェンダー」に関する図書のコーナーを設けました。どうぞご利用ください。



また独立行政法人・国立女性教育会館 (NVEC) よりパッケージ貸出をしていた「科学とジェンダー」に関する新しい図書80冊を展示しています (2020年2月末まで)。こちらをご覧ください。



### GRL連続セミナー《ハラスメント》

#### 第1回「メディアとハラスメント」

講師：林美子氏 (ジャーナリスト)

日時：8/2 (金) 17:00-19:00

場所：GRL 2階レクチャールーム

参加費：無料。どなたでも参加していただけます。(申込不要)



プロフィール：2016年まで朝日新聞記者。労働やジェンダーの分野を中心に取材、執筆活動を続ける。2018年5月、「メディアで働く女性ネットワーク」設立に携わり、2019年5月まで代表世話人。現在、お茶の水女子大学博士後期課程 (ジェンダー学際研究専攻) に在学中。

### ご寄附のお願い

GRLは、ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、フェミニズム、ジェンダー研究に関わる図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集・保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々に利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことをめざしています。

GRLのようなジェンダーをテーマとした研究活動施設は全国的にも珍しく、その個性的でユニークなありかたは、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献しうる大きな可能性を有しています。GRLがジェンダー研究を深化させ、その成果を社会に還元できる知の拠点へと成長していくためには、文献、史資料を散逸させることなく、蒐集、保存、整理し、広く提供できるライブラリ、アーカイブの存在が不可欠です。

GRLが、先人たちの知の営みを次代に継承していけるよう、みなさまのご支援を賜りたく、お願い申し上げます。ご寄附金等をいただける場合には、こちらのメール (grl@adm.nagoya-u.ac.jp) までお知らせ下さい。



お問い合わせ：grl@adm.nagoya-u.ac.jp

電話：052-789-5111 (代表)

アクセス：〒464-8601 名古屋市中種区不老町  
地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分